

コウモリの図書館

藤原 由紀子

NHK郡上八幡短歌大会から、特選受賞の知らせと招待状が届いた。昨年からは少し体調も悪く、出かけるかどうか迷ったが、岐阜に住む友人に久しぶりに会いたいと思い、参加することにした。

母は長く短歌のグループに属し、勉強を続けていたが、老齢になつてから閉じこもりがちになつていた。少しでも母を喜ばせたくて、自宅で共に短歌を詠み始めたのは10年ほど前。母に指導を受け、五・七・五・七・七と指折り数えて詠むことから始めた。

その後、年に数回各地で催されるNHK学園の短歌大会に、二人で投稿することを思いついた。時々母が入選することもあり、楽しみになつた。

昨年母が104歳で亡くなり、心寂しく過ごしていたが、その後も応募用紙が次々と送られて来るので、私一人でも投稿することにした。この度の特選は母への親孝行になつた気がした。

大学職員の長女は度々ポルトガルを旅している。俳句の結社にも属し、熱心に吟行も続けている。彼女がほれ込むポルトガルという国。自分の目で確かめようと、思い切つて、娘の同行を断り、一人で出かけた。

世界遺産であるコインブラ大学の図書館を訪れた時、聞いた話に驚いた。室内は黄金に輝く豪華な書棚、天井にはフレスコ画が描かれ、世界一美しい図書館といわれている。

そこでは夕方扉に鍵をかける前、すべての机に布をかける。夜中

たくさんのコウモリ達が飛び回り、ふんを落とすからだ。そのコウモリが、本を食い荒らす紙魚（しみ）などの害虫を食べ、30万冊余りの蔵書を守っているという。それを短歌にしたのが受賞となつた。

夕暮れに羽音かすかにコウモリ来コインブラ大学図書館の守

受賞式の帰り、直前まで連絡していなかった友人に、思い切つて電話をかけてみると「わたしも会いたかつたのよ」と、すぐ岐阜駅まで来てくれた。

40年ほど前、大阪で仕事をしていた時の先輩である彼女は、聡明で行動派だった。岡山出身だが、結婚してニューヨークで出産し、現在は岐阜市に住んでいる。長い間直接会うことはなかったが、今回不思議なほど深い話をする事が出来、最近の心身の疲れを癒すことが出来た。これからも出来る限り歌を詠んでいこうという意欲が湧いた。

子供らが微（ほほ）笑む国よポルトガル木々の上にはコウノトリの巣

作者 藤原由紀子

題名 コウモリの図書館

原典 山陽新聞夕刊エッセー

原典の掲載日 2018.10.04